

海外文化研修に参加して

— アメリカで過ごした夏 —

榎本 裕子

今年の夏、私は素敵な思い出を残すことができた。そのようにできたのも、まさに海外文化研修に参加するというチャンスに恵まれたからである。

正直言って、私はこのプログラムに参加するまで、日本の外にでたことはなく、まして日本語を母国語としない人々との会話なんて無いに等しかった。しかし私は入学当初からどんなことでも挑戦しようとしていた。だからそんな私であってもアメリカで1ヶ月近く、しかも一人一家族という環境でホームステイをするという、一瞬おじけづいてしまうような、このプログラムにあえてチャレンジしたのだ。

とは言うものの、出発までの毎日は、やたら自信満々になったり、本当にアメリカへ行くのだろうかとか夢心地になったり、ただただ恐ろしくて不安になったりという気持ちの波の繰り返しだったが…。

実際、今回の研修では本当に色々なことがあったが、何と言っても、ホストファミリーと過ごしたことは私にとって一番印象的だった。

ミネアポリス空港に到着すると私達参加者はすぐにちりぢりとホストファ

ミリーの家に行く。緊張が極度に達していた私の足どりは軽いと言える状態ではなかったが、そんなことでひるんでいられなかった。と言うのも、私のホストファミリーが手に持っていた段ボールには、大きな字で、実にカラフルに“YUKO ENOMOTO”と書かれていて、すぐにわたしの目に入ってきたからである。

まず、彼らはまさにアメリカ流に私をむかえてくれた。はじめは挨拶と自己紹介だったため、どうにか私の英語力で乗り切った。が、しかしである。調子に乗って来た直後、会話が発展していくに連れて、私は話すにしても、聞くにしても英語の壁に思い切りぶつかった気分をつくづく味わってしまった



中央が筆者

た。このように、彼らとの一ヶ月は始まったわけである。

アメリカでの初日は、はっきりいって楽しかったというよりは、孤独な異邦人という気分だった。昨日までは日本語がいやでも聞こえていたのに、突然英語しか聞こえない世界にいる。そして自分も英語を使わなくては通じないのである。頭では理解していても、なんとも変な気持ちがした。日本にいる家族へ電話したとき、日本語がすごく温かい気がした。こんな気持ちは初めてだった。

私のホストファミリーは 5 人家族で、弁護士のお父さんに司書をしているお母さん、それから 21 歳・18 歳・15 歳の 3 人姉妹と 1 ぴきの犬である。彼らは初日から本当に親切にしてくれて、不安でいっぱい私の心も本当にじんんとした。

到着した次の日から、早速色々と授業が行われるベセル大学へ行った。初日に引き続き不安に支配されていた私は、そこで聞いた話にショックをうけた。話の内容はこんな感じである。一週間ぐらいは、さまざまなことに新鮮さを感じる。この感覚を大切にするといい。また最終的にコミュニケーションというのは、人対人であるのだ。(かなり省略している。) 当然と言われればそれまでだ。しかし、初日の私はホストファミリーを、アメリカ人を、「人」というよりはむしろ「英語」という枠だけで捉えていたのである…。

この話を聞いた後、私は気分がかなり

楽になり、積極的に物事に取り組めるようになった。お互い人間なのだから、根本的な人間の感情は理解しあえるだろう、と私は考え、そう実感したのである。

多少度胸がついた私は、ホームシックとは無縁の、毎日が驚きと発見とで楽しくなっていった。ホストファミリーとも次第にテンポがあわせられるようになり、一緒に笑ったり、つたないながらも冗談を言えるようになった。申し訳ないと思いながらも日本人代表として意見を言う時もあった。また彼らに食生活(彼らのペプシを飲む量にはさすがに驚いた…)から、日曜日には教会へ連れていってもらったりなど、さまざまなアメリカの文化を教えてもらった。ある夜、私はノリのいい三姉妹からダンスを教えてもらい、家の中で大声をだして息を切らせながらおいに盛り上がったこともあった。日本に戻ってからは誰にも披露していないが…。思い出したらきりがない。

一方で、もちろん英語が通じないことや、文化の差という限界で失敗したことも数多くあった。その時は言語の重要性や、自分とアメリカ文化の差を心から感じたが、それも経験の一つとして学べたのは本当によかったと思っている。

このようにアメリカの一家庭で過ごしたことによって、日常生活からアメリカの文化、歴史を肌で感じる事ができた。また普段あまり意識しなかった日本という国、日本人、日本の文化

を、更に言えば自分自身が何なのかを強く感じるという経験もできた。やはり百聞は一見に如かず、である。それだけですべてを理解できるとは思わないが、私なりに今回の研修に参加したことで多くのことが得られたと確信している。そして、この経験をこれから

の生活に活かしていきたい。

ちなみに、現在もホストファミリーとは手紙やEメールで連絡をとりあっている。私は、またいつか彼らに会える日を楽しみにしている。

(えのもと ゆうこ

本学法学部政治学科1年)